

# 第30期第3回京都市社会教育委員会議の模様を マナビィがレポート！



平成24年3月5日（月）午後3時～5時、京都市生涯学習総合センター（京都アスニー）にて第30期第3回京都市社会教育委員会議が行われました。今回もわたくしマナビィがレポートします！

## 出席委員（12名）

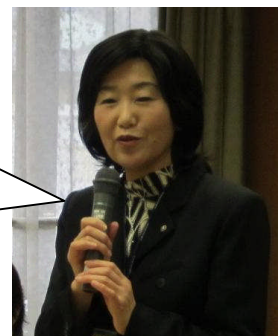
井上 満郎議長，西脇 悦子副議長，井上 章一委員，大八木 淳史委員，小辻 寿規委員，齊藤 修委員，茂山 千三郎委員，通崎 睦美委員，野村 佳子委員，林 早苗委員，松重 和美委員，吉川 左紀子委員



## ■開会に先立ち、今回初めて出席された林委員による自己紹介！

○ 林 早苗 委員 京都市小学校長会役員（京都市立仁和小学校長）

小学校では、小学校教育自体が生涯学習者を育む第一歩だと考えています。今年度は新学習指導要領が全面実施となり、指導内容も大変膨らみました。学校現場では年度末を迎え、一年間の取組を振り返っているところです。小学校の立場として皆様と一緒に生涯学習を推進するために力を尽くしていきたいと考えておりますので宜しくお願いいたします。



## ■開会 [井上議長]

## ■議事-1 「生涯学習啓発パンフレット」について

（事務局から）

- ・ 製作方針について、前回の会議でも一番意見が多かったのが、幅広い対象者がおられる中で、どうしても総合的な事業の説明に終わってしまうことです。実際、幅広い対象者の例として、学生、「おやじの会」の方、会社員、高齢の方を設定し、それぞれこのような学びはどうですかと取組を紹介するようなパンフレット（→右の表紙画像からリンクしています。）になっていました。しかし、それぞれのターゲットごとにパンフレットを作るのは難しいこともあり、内容をばらして簡単なものにして、ニュースレター方式で年間数回発行するような形で、時宜に応じて配布対象を絞り込んで情報を発信できたらと考えました。
- ・ 構成内容等は、社会教育委員や京都市生涯学習市民フォーラムの加盟団体に、自身の学習体験、学ぶことの楽しさについて語っていただくようなページを設けます。配布対象や時宜に応じた特集記事を組み、一点豪華主義で、言いたいこと・知らせたいことを重点的に示そうというもの。市の取組だけでなく民間団体の事業の取組も幅広く扱い、インターネットのコンテンツ（[京都市生涯学習情報検索システム「京まなびネット」](#)）とも連携させる予定です。
- ・ 発行計画としては、以下のように考えています。



- < 回数 > 年間3～4回程度
- < 体裁 > A4両面刷を基本とし、内容に応じて増頁
- < 部数 > 10,000部程度  
（配布対象により部数・配布場所を検討）
- < 紙面構成 > 表面：特集記事（メイン情報）  
裏面：社会教育委員によるコラム、生涯学習施策・イベント情報等



号	発行時期	メイン情報	コラムテーマ	主なターゲット
1	5月頃	京まなびネットの紹介 (モバイルサイトの新設)	学ぶ楽しさ	大学等での配架により、若者層への働きかけ
2	9月頃	生涯学習市民フォーラム紹介 (シンポジウム案内)	シンポジウムのテーマ関連?	アスニー講座受講者など、比較的高い年齢層への働きかけ
3	1月	生涯学習をはじめよう(成人として必要な情報提供)	新成人に贈る言葉	成人式で参加者に配布成人式サイトとの連携

※ その他、既存の広報媒体(市民しんぶん、家庭教育新聞「あしたのために」等)に生涯学習の特集記事を掲載することなどを検討



○ 井上 満郎議長(京都市歴史資料館長、京都産業大学名誉教授)

年に3、4回更新、A4判で両面刷り合計2ページ、そこに盛り込める情報は限られていますし、情報を起承転結で整えて提供することよりも「京まなびネット」のサイトに入っただけのための導線という意味合いを持たなければなりません。考えないといけないことが多いですが、御意見いただければと思います。

○ 齊藤 修委員(京都新聞社相談役)

たくさんの方に読んでもらって学習活動につなげることは大切ですが、実際、パンフレットに掲載されている講座にどれくらいの方が参加されているか実績はあるのでしょうか。目標的なものがあるのか、あるとすれば実績はどうか教えていただきたい。

若い人の場合は、こうしたパンフレットなどを見てもらうより、むしろ一度「京まなびネット」のサイトを覗いてみて面白い内容があればブログやツイッターでどっと広がります。「京まなびネット」の中身をいかに若い人が食いつく内容にするかを考えれば、一気に若い人の間で認識が広まるのではないかと思います。また、高齢者の方への広報がもう少し回数があっても良いと思います。



これまでのパンフレットでは手応えがないということであれば、ニュースレターの形式にトライされるのも良いのかなと思います。

(事務局)

各講座で参加人数は把握しています。生涯学習市民フォーラムのシンポジウムですと、基本は会場であるシルクホールを満員にさせること、700名を目標に常々やっています。京都アスニーの講座でも、定員設定が満杯になることを目標にしています。

(事務局)

例えば、「ゴールデンエイジアアカデミー」という毎週金曜午前中に1時間半の無料の講座があります。第1会場が400名定員、第2会場が200名定員で中継を見ていただく形で、テーマにもよりますが平均的に約500~600名の方にお越しいただきます。また、山科アスニーも同時中継しており60~70名来られます。現在の歴史ブームで、大河ドラマの関係などを取り上げますと、700名を越える方にお越しいただきます。高齢の方も非常に多いので、こちらが是非知っていただきたい健康・環境・防災の問題などのテーマで企画したりすると、参加者数が300名くらいにぐっと落ちたりと、テーマによって波があります。定員までは来ていただきたいという思いで実施していますが、毎回リクエストのあるものだけでなしに、知っていただきたい情報を発信していくことも必要かと思

いますので、テーマによって参加者数が落ち込むことはあっても、それはそれで講座として必要なことだと思っているのが実情です。

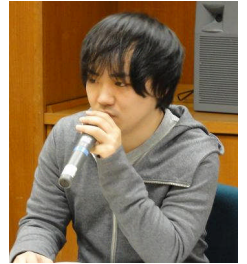


○ 齊藤 修委員

よくわかりました。おっしゃるように、テーマによって参加者数が違うのは確かですし、必ずしも受けの良いものを作ることが良いわけではないとも思います。

○ 小辻 寿規委員（市民公募委員，大学院生）

大学生がまずこのニュースレターを手取るのかという点ですが、多くのパンフレットが自ら必要であるものでなければ実際取りにくいと思います。取って見てみようかなと思えるもの、例えばクーポンがついているといった工夫がいるのではないのでしょうか。



インターネットの配信についても、インターネットを通じて人々に伝えていくのは自身のホームページだけではなかなか難しいことです。他の委員もされていますが、フェイスブック等を使って配信すると、多くの方に見ていただけるのではないのでしょうか。たとえば「いいね！」ボタンを押すと楽しめるコンテンツ、例えば「京都人診断テスト」などを作って、そのときに今後こちらが相手に情報を発信できるように許可を取ってしまうこともできるので、インターネット上を通じて配布対象の案に該当しない方にも幅広く発信できるのではないかと思います。

パソコンだけでなく、携帯電話からも「京まなびネット」を見やすく御利用いただけるようになりました！もちろんスマートフォンにも対応しています◎



（事務局）

検討させていただきます。確かに大学に置いてあっても取りにくいというのがありますし、「京まなびネット」のモバイルサイトができたこともあり、携帯電話会社に置くことも考えましたが、この大きさのパンフレットを置くスペースがないということで、いろいろ考えています。一番手に取りやすいのは、喫茶店に置いてあるような名刺型のものという話を聞いたことがありますので、考えないといけないかなと思っています。

ニュースレター第1号発行の際はお知らせしますので、お見逃しなく！



○ 井上 満郎議長

最初にニュースレターを手取ってもらうことから始まりますから、そのためのインパクト、入口の部分がある意味一番大事な部分です。言いたいことがたくさんあるからといって、たくさん情報を載せるのではなくて、どれか一つ特化・強化するのも必要ではないかと思います。

社会教育委員が寄稿するという案で進めておられますので、先生方に依頼があらうかと思えます。前向きに御検討いただければと思います。

■ 議事-2 「京都市成人の日記念式典・はたちプロジェクト」について

（事務局から）

※ [成人式ニュース](#)を御参照ください。





○ 井上 満郎議長

様々な工夫がされて行われているわけですが、ここしばらく出席させていただいて、少しマンネリかな、もう少し仕掛けがあっても良いのかなという感じです。

参加率が60%に近いということに驚きました。二十歳の若者が6割まで参加するというのは私にとっては驚きです。それをアップさせたいという気持ちのようですが、アップしても今のやり方では会場に入らなくなるので困る、そのあたりをどうするのか。

私は半世紀前、ダークダックスにつられて成人式に行きました。儀式として参加しようという意志はありませんでしたが、とにかく参加する仕掛けとして御意見いただけたらありがたいと思います。

「ダークダックス」さんは50年以上のキャリアを持つ男性4名の重唱団です。



○ 松重 和美委員（京都大学大学院工学研究科教授）

時代に応じて、若い人たちが、例えば震災に関連した取組やスポーツか何か一体感のあるようなものが出てきて、儀式にプラスして若い人の時代を感じられるようなイベントになるのが良いかなと思います。私も6割近い参加率は多いという印象を持ちます。出席して良かった、思い出に残ったというものにするのに、ある程度工夫することも重要かなと思います。



○ 井上 満郎議長

ただそこにいるだけでなく、後々まで印象に残るような成人式に、というのが良いかと思うのですが。

○ 吉川 左紀子委員（京都大学こころの未来研究センター長）

京都らしい成人式というのがあれば、全国のメディアに取り上げられ、それが逆に京都の若い人たちにフィードバックされて行ってみようかという気になると思います。エンターテインメント的な要素よりも、京都の伝統など、若い人たちが普段あまり意識しないけれど、区切りの年に改めて見てみると、京都はこういうまちだったのかと思えるような、例えば昔の成人の儀式はどういうものだったのかとか、きっかけがあったときに教えてもらえるととても記憶に残ると思うので、そういう「京都ならではの」ものが考えられるかなと考えました。



○ 茂山 千三郎委員（狂言師）



思いつきで言うならば、例えば、同時進行で各会場を中継で結ぶというスタイルもあるのではないのでしょうか。メイン会場はみやこめっせ、スポーツをしている人は体育館で、音楽好きな人はコンサートホールに集まり、能・狂言が好きな人は能楽堂に集まり、と中継で祝辞等々だけ聞いて、あとはスポーツしたり、どこかのお寺で何かしたりと自分が行きたいところを選んで行けるようなものも良いのではないかなと思います。実際やるとなると人数も金銭的にも大変なことは想像するだけでもわかりますが…

それに、同じ会場に集まっても人が多すぎて同級生にはほとんど会えないのです。自分もそうで、結局二次会を催して、そこで出会うことになるので、会場はばらばらでやっても関係ないのかなと思います。

確かに、友達に会えるからこそ成人式に行きたい！と思うものですよね。



○ 通崎 睦美委員（マリンバ奏者）

「儀式に参加したら負けだな」みたいなのが、ひと昔前の京都の学生の特徴だったんじゃないかなと思います。私の友達で行っている人はいなかったのに、成人式は成人式らしくやったらいいのではないかなと思っていました。茂山委員がおっしゃったのはグッドアイデアで面白いと思います。

今年二十歳になる方の話では、成人式に行く第一目的は小・中学生のときの友達に会うことなのです。茂山委員のおっしゃったことのバリエーションですが、小学校単位で成人式をしてもいいくらいと思ったりしました。



○ 林 早苗委員



学区が主催する成人式ということで、本校（仁和小学校）のことになります。ずっと地域でお祝いをしていただけており、今年は約7割の成人が学校に集まりました。例年はもう少し多いです。地域の教育後援会部会という組織が成人式の前日に設定し、8年前に卒業していった仲間・恩師・当時の学校長が私たちと一緒に祝いします。しかし、なかなか全小学校でとは言えないし、急には難しいかと思えます。

恩師・友達に会うのが楽しみでということで、会場に恩師からのメッセージのコーナーを設けているのはそういった工夫だと思いますが、実際、ものすごい人数が集まりますので、会いたい人を探せなかったという声を聞きます。

（事務局）

地域の成人式は、把握しているだけで20箇所くらいしかありません。おっしゃるとおり、第2展示場で校名板を目印に皆さんの待ち合わせ場所としていますが、そこまで行きつけず、携帯電話の電源をお切りくださいと言っても、やはり電話を持ったまま右往左往されている方が多いのが現状です。様々なアトラクションを考えたりしますが、やはり友達に会いたい、それが一番の目的ということで、そのために何をしたら良いか。写真撮影をよく頼まれるので、写真係を置いたらお役に立てるのではないかと感じたりもしました。



補足として、参加率が高いと思われたということですが、データとして残っている参加率で言うと、昭和62年が20%しかありませんでした。それがだんだん増えて今の参加率になりました。第1回は京都新聞ホールで1954（昭和29）年1月15日に市の主催で式典が開かれたという記事が京都新聞に残っています。昭和36年のダークダックス出演のときが約2,500名の参加。当時の2,500名はかなり少ない率だったかと思えます。



○ 井上 満郎議長

私のときは会場の問題で抽選をしていたので、2,500名しか行けなかったのです。成人の数自体は突出して多い年でした。

○ 西脇 悦子副議長（京都市地域女性連合会会長）

長い間、市民の間では「抽選にはずれるので式典に行けない」という声をよく聞いていました。早く申し込まないといけないし、抽選に当たらないといけない。どのあたりから少なくなってきたのでしょうか。今年、私は2回目の式典に出席して、





当日は出て行く人と入る人で会場に寄りつけないぐらい人が多く、外で騒ぐ人もいたけれど、中に入ると厳粛な姿勢でやっていました。少し席が空いていたのが気になっていました。式典に申し込んだら責任を持って行く、それくらい魅力のあるものにしないといけないと思いました。当日皆さん正装しているので、正装のままでうろうろしたり、同窓会などの目的で集まれるところが会場周辺にいくつかあれば良いかなと思っています。



○ 井上 満郎議長

副議長らしい御意見です。そのような場所まで考えて実施はしていませんね。女性も男性も完全に正装で、民族衣装も随分増えてきまして興味深く見えています。

○ 野村 佳子委員（市民公募委員、会社員）

「一つにまとまって何かやりたい」という気持ちが若い方にはあり、また懐かしい思いをどう汲み取るかは難しい課題ですし、おっしゃるように、初めから行かない主義の人もいます。そういう方はどのように成人の日を迎えられているのかアンケートで情報を得て、「こういうふうにご過ごされている方もいます」と逆に情報発信されてもいいかなと思います。



着飾るのと反対に、精神統一するような座禅をしたい、そういう一日を過ごす方もおられるかもしれないので、いろんなインスピレーション・ツールを用意してあげるのも一つの手かなと思います。

○ 大八木 淳史委員（元ラグビー日本代表、芦屋大学特任教授）



成人式を京都市としてどういう位置付け・定義付けとするかがまず先だと思っています。「成人になった自覚を持たせる」という位置付けなら、強制的に集まる必要性もないと思うし、エンターテイメントとしてみんなが集まることで市民に還元しているところに特化すると、成人式の日から一週間だけ飲食店で使える京都市の地域通貨とかを作るのもありかなという気もします。使う・使わないは別にして、記念に置いておこうかな、二十歳になったときの地域通貨やというのも面白いかもしれませんね。一方で晴れ着を用意できないから参加できないとか、いじめられていたとか嫌な思い出の時代で集まることに抵抗があるという方もいると思いますので、参加率を上げることだけを求めると難しいと思います。



○ 井上 満郎議長

確かに式典に参加しないから成人であるという意識を持っていないとなるわけではありません。様々な眼差しを持って見ないといけないと思います。

たくさん人が集まるということは、それだけたくさんの思い・考えがあるということ…



○ 井上 章一委員（国際日本文化研究センター教授）

今、大八木委員がおっしゃったことに尽きると思います。同窓会もそうですが、あまり小中学校で幸せだったという記憶のない人は、そういう集いにどういう気持ちを抱いているでしょう。アンケートでは自分の本当の思いは書かないでしょうね。ひたすらそういう催しを憎むことだけで人生を過ごすと思いませんが、集いに人を集めようとする立場の人は、その中で暗い気持ちを育てている人のこともどこかで噛みしめておいてあげてほしいなと思います。



なるほどと思ったのは、「思い出成人式」への参加理由例で、80才の女性が「20才のときには成人式はなかった」と言っておられます。1952年には成人式はなかったんだな、とこれを見て思いました。あんな催しをだれが考えて、どういう経緯で作出したのだろうということ調べるきっかけになるなと思いました。僕は「学び」という言葉は嫌いですが、本当に市民に学習意欲を持ってほしいと思うなら、こういうところからなぜ成人式ができたのかという疑問を育むような、つまり学ぶきっかけはあちこちにあると思います。

答えをばらしてしまうと…「成人式」は、埼玉県蕨市（当時蕨町）で戦後すぐに開催されたのがはじまりとされています。（1946（昭和21）年11月11日）敗戦による虚脱感の中、次代を担う青年達に希望を持たせ励ます趣旨で開催され、みかん1個（!）が支給されたそうです。その後、1948（昭和23）年に法律で「成人の日」の祝日が定められ、翌年に国から適当な行事の開催を実施するよう依頼されたそうですよ。



#### ○ 小辻 寿規委員

私の妹もつい最近成人になり、同級生と第1回・2回のどちらに出るのか示し合っていました。会いたい気持ちが強い方からしたら、違う時間に出て待たないといけないのは面倒なことがたくさんあるので、茂山委員がおっしゃったように場所が違ったり、体育館、地区ごとに分けていただくことも1つかと思います。



#### ○ 井上 満郎議長

様々な意見を聞かせていただきましたが、教育委員会で御検討いただいて前進した成人の日記念式典をお作りいただければと思います。

### ■ 議事-3 平成24年度「指定都市社会教育委員連絡協議会」出席者及び「第54回全国社会教育研究大会山梨大会」実践事例発表候補者について

（事務局から）

- ・平成24年度「指定都市社会教育委員連絡協議会」は、平成24年5月18日、堺市で行われます。熊本市が加わって指定都市は20市となり、様々な大きさの市があり議論が噛み合わないこともあります。20市いろいろな意見を聞くことも大事かと思えます。
- ・「第54回全国社会教育研究大会」について、第53回は京都大会でしたが、24年度は10月25・26日に山梨大会が行われます。場所は甲府市の総合市民会館をメインに、分科会があります。今年度の京都大会からパネルディスカッション方式になっており、そのパネラーはこれまで開催市が決めていましたが、公募で決める形を取っています。パネラーとして参加いただける方を御紹介いただきたいと照会がきており、是非とも分科会の場で発表いただければと思います。



研究主題は、「地域の絆を深め 活力を生む 新しい社会教育を創る」です。「絆」は、社会教育を考える上では欠かせないキーワード！



#### ○ 井上 満郎議長

すぐに御希望を、とはいきませんので、後日委員の先生方個人に事務局から連絡があらうかと思しますのでそのときは宜しく願います。



## ■報告-1 「京（みやこ）まなびミーティング」について

（事務局から）

- ・平成24年1月23日に吉川左紀子委員によります講演「心をつなぐ仕事：2種類の共感力を育てる」を実施しました。これは、「親と子のこころの電話」相談員の研修として行われました。
- ・[「親と子のこころの電話」](#)を説明しますと、昭和59年、PTA・京都市生涯学習振興財団・教育委員会の三者で電話相談事業が設立されました。相談員はボランティアで、研修を積んだ方ということで養成課程の成績優秀な方に委嘱しています。現在15期生ままで33名の方にお願ひしています。日々の研修として、一泊研修をはじめ自主研修や個別研修もされており、真摯なボランティアで頭が下がる思いです。今回の全体研修会についてはホームページにレポート等を掲載します。

マナビのレポートを是非読んでください！（タイトルからリンクします。）



○ 吉川 左紀子委員から…[京まなびミーティング（4）講演「心をつなぐ仕事：2種類の共感力を育てる」](#)  
御紹介があったように、「親と子のこころの電話」相談員の方に講演をさせていただきました。カウンセリング的なお仕事をされているので、私の研究している表情認識や共感をテーマにした基礎研究について、相手のこころをどういうふうに理解したらいいのかなということをお役立てればと思ってお話しました。熱心に聞いていただき、たくさん質問も頂戴しました。



### ○ 井上 満郎議長

今後も委員それぞれの先生方に様々な形でお願いすると思うので御協力をお願いします。

## ■報告-2 平成24年度「教育予算の概要」について

（事務局から）

- ・平成24年度の予算案の概要について説明しました。

## ■報告-3 平成24年度「学校教育の重点」について

（事務局から）

- ・例年、京都市教育委員会では「学校教育の重点」を発行していますが、昨年のもので内容を抜本的に見直しました。市民ぐるみ・地域ぐるみで学校づくりを進める観点から、教職員・保護者向けに同じものを発行していましたが、教職員から、教育委員会のメッセージがわかりにくいので体系的にしてもらえないかという意見があり、今回、教職員向けと保護者向けとで分けて発行することといたしました。
- ・時期的にも、今年度から小学校の学習指導要領が全面実施となり、来年度から中学校でも全面実施と移行の時期にあたっています。学校現場の年代構成もここ10年の間に4割の教員が入れ替わり、ベテラン教員から若手教員への引継ぎが希薄になることを懸念して「学校教育の重点」をまとめました。



### ○ 井上 章一委員

私は大学の研究所に勤めていますが、「学校運営の着眼点」の中に、「先生方がそれぞれ評価者の視点を持って取り組む」とありますが、結局、書類をたくさん書かされるんですね。私たちのところでも評価に向けて書類をたくさん書くので、肝心の研究時間がなくなったり、評価で良く思われるよ



うな仕事をしなければならないということで、それに追われてしまうことがあります。小中学校がどうなっているのかわかりませんが、先生方を目先の評価と書類書きに追いやっている部分があるとすれば、あまりそこにむちを当てるようなやり方は好ましくないのではないかと思います。

(事務局)

今おっしゃったことはそのとおりだと思いますが、そのような意図ではなく、市民の視点、保護者の視点という意味で、いわゆる学級王国という言葉が一方でありますので、そう陥らないようにという意味です。井上章一委員のおっしゃった視点には十分気をつけながら、教育委員会でもプロジェクトを作って学校の事務軽減を図っていかうということも進めています。

(事務局)

最後に、この京都アスニー1階にあります「古典の日記念 京都市平安京創生館」という展示施設を紹介させていただきます。従来から平安京の1,000分の1復元模型や平安京にあった施設の模型を展示・一般公開していますが、



アスニーの開館30周年記念の取組ということで、特別展として「京の地図学者 森 幸安の世界」を行っています。森 幸安は江戸時代に実在された京都で生まれた地図学者ですが、教科書に出てくる伊能忠敬が活躍される半世紀以上前に、400点もの非常に精密な地図を残されています。一般的な知名度はそれほどありませんが、地図自体は時代を象徴するような優れたものを残しておられます。伊能忠敬の場合は日本沿岸を歩いて実測されましたが、森 幸安の場合は様々な情報を全国、世界中から集められて一枚の世界の地図に落とすということで、情報が集約された地図を作成されたという意味でも貴重な作品を残しておられます。

国際日本文化研究センターと連携共同事業で、アスニーでは2年間にわたり展示しております。展示品を順次入れ替えています。6回目として「世界図ー世界の中の日本ー」という地図作品を展示しておりますので、御覧いただければと思います。

第6回は、4月25日まで展示されていますので、是非御覧ください。

#### ■閉会 [井上議長]

次回開催は6月頃を予定しています。

次回こそは市民の皆様が傍聴に来てくださらないかなあ…



#### ■閉会挨拶

閉会に当たり、宮本昌昭生涯学習部長から挨拶がありました。

